

北朝鮮の山奥にある「強制収容所」をなくすため、多くの人びとに呼びかけています。

nf-staff@netlive.ne.jp



<http://nofence.netlive.ne.jp>

VOL. 24

2013年7月

〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 【郵便振替口座】NO FENCE / 00180-1-707147

## INDEX

北朝鮮はかつて政治犯の存在を認めていた! ・小川晴久	..... 1
強制収容所と死刑 ・李恩元	..... 2
有事の際、清津市輪城25号管理所では高圧電流で感電死させる ・宋允復	..... 3
NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」本田徹医師の番組を見て ・菅原民生	..... 4
同上そして補足 ・小川晴久	..... 4
歴史をつくるー今やるべきことは何か! ・山下誠	..... 5
日本人よ目を覚ませ! ・小川晴久	..... 7
「活動報告」本の感想会 ・並河真知子	... 10

### 訂正とお詫び

23号3面に掲載した「新世話人ー荒井正人」に誤りがありました。お詫びして、以下の通り訂正致します。

(×)「私は数十年、山梨・長野に居まして」 → (○)「私は十年間、山梨・長野に居まして」

## 北朝鮮はかつて**政治犯の存在**を認めていた!

副代表 小川晴久

複

数の体験者の手記、衛星写真の立証にも拘らず、北朝鮮当局は「我が国には政治犯という言葉は存在しない。従って政治犯収容所は存在しない。」という言葉遊びに等しい形で、白(しら)をきっている。明々白々な事実を100%否定するという良心の呵責のひとかけらもない北朝鮮当局の回答に、世界はこの十数年立ち往生させられている。この真っ赤な嘘を突き崩さねばならない。この嘘を突き崩すには、世界の半数以上の人々が北朝鮮の強制収容所の事実を知る必要があり、そのための努力が今懸命に重ねられている。申東赫氏の手記“Escape from Camp 14”が現在十数ヶ国語に訳されていて、自国語で体験者の手記を読む努力が進んでいる。台湾で繁体字(正字)による中国語訳が今年2月に出版され、この台湾版が中国大陸でも普及することが望まれて

いる。日本ではNHKテレビがニュース特集で北朝鮮強制収容所問題を報道することが求められている。今一つ北朝鮮当局の嘘を突き崩す方法がある。それをここで示そう。それは北朝鮮当局がかつて政治犯の存在を認めていた事実があるのである。

1995年4月~5月アムネスティ国際ナショナル(以下 AI)本部の代表団が北朝鮮の人権協会の招きで平壤を訪問したとき、北朝鮮当局はAIの代表団に、北朝鮮には三つの教化所があり、800から1000人の被収容者の中に「反国家」活動による収容者が240人含まれていると認めたのである(AI報告書「朝鮮民主主義人民共和国“閉ざされた扉の向うの人権侵害”」1995年12月24日発行、AI日本支部訳1996年1月8日発行、9頁)。因みにAIのこの文書のAI INDEXはASA 24/12/95。

2頁へ続く ➡

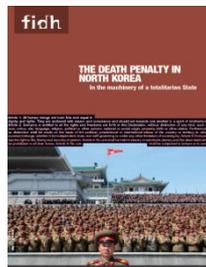
現在の北朝鮮刑法は第3章「反国家及び反民族犯罪」の第59条で、「反国家目的による政変、暴動、示威、襲撃に参加するか陰謀に加担した者は、5年以上の労働教化刑に処す」と規定している。この「反国家犯罪」者を政治犯と言わずして何というか。北朝鮮当局者は1995年4月～5月にAI代表団に240人の反国家犯罪による収容者の存在を言明していたのである。北朝鮮全土で240人という数字は全く信用できないが、「反

国家」活動による収容者が240人存在すると認めたことは、近年その存在を100%否定している事態からみて、大変重要であり、貴重である。この事実を今後あらゆる場で主張してゆこう。北朝鮮政府が1995年政治犯(反国家犯罪者)の存在を認めていた事実を。北朝鮮に対する第2回UPR(普遍的定期審査)に際しても、北朝鮮人権状況調査委員会(COI)に対しても、また広く国内外にたいしても、この事実を知らせていこう。

## 強制収容所と死刑

世話人 李恩元

今年5月に発表されたFIDH(国際人権連盟)の「北朝鮮の死刑制度(The Death Penalty in North Korea: in the machinery of a totalitarian state)」(右\*)。



上記の報告書には、公開処刑を目撃した12人の北朝鮮出身の亡命者からの証言とともに、「超法規的、略式または恣意的処刑」など、北朝鮮における全ての死刑執行の中断と死刑制度の廃止などが勧告されている。十分ではないものの、「ソ連のグラウグのような拘禁施設」である北朝鮮の強制収容所についても少し触れられている。

北朝鮮の刑法において死刑が規定されている「犯罪」は、6種類。そのうち殺人罪(第278条)を除いた5種類の「犯罪」がいわゆる「政治犯罪」である。それは次のとおり。

- 第59条 「国家転覆陰謀罪」
- 第60条 「テロ罪」
- 第62条 「祖国反逆罪」
- 第64条 「破壊暗害罪」
- 第67条 「民族反逆罪」

(2009年改正刑法)

※2005年刑法では、第64条「破壊暗害罪」に対する最高刑は「死刑」ではなく「無期労働教化刑」であった。

いずれも、「反国家的行為」に対する「罰」としての殺人を平然と合法化している。何気なく発した国(あるいは金一族)に対する愚痴で殺される(かもしれない)なんて、なんていう不条理か!

「反動分子」とみなされた人びととその家族が死ぬまで監禁されている強制収容所では、勝手に死ぬことさえできない。私たちと同じ人間であるのに、たまたま北朝鮮に生まれただけで人間として生きる、全ての権利を剥奪される。

今回のFIDHの報告書を通じて改めて気づいたことがある。それは、死刑——たとえ殺人を犯した者であろうとも——も、強制収容所——しかも連座制は冤罪そのもの——も、国家権力による犯罪だということである。

北朝鮮がこのまま強制収容所の存在を認めないならば、先ず、私は百万歩譲ったとして、次のように主張したい。「政治犯罪に対する処罰を直ちに止め、彼らの生存権と移動及び居住の自由を保障せよ!」と。

\*上記のFIDHの報告書は <http://www.fidh.org/> で閲覧可能

# 有事の際、清津市輸城 25 号管理所では 高圧電流で感電死させる

事務局長 宋允復 

**北**朝鮮の第三次核実験実施(2月12日)の3日前、2月9日にNO FENCEが日本に招いた15号ヨドク収容所経験者 李英秀さんの話の中に、

「2000年代初頭、韓米合同軍事演習で情勢が緊張していた時に、手紙の受け渡しのお使いでヨドクに行ったら、対応に出てきた保衛指導員が『今は時期が良くない、必要があればこちらから呼ぶから、今回は早く平壤に戻れ』と言う。『どうしたのか』と問うと『今、金正日からの特別指示で、終身区域の囚人の中で殺す対象と殺さない対象を分ける作業をしている、いったん命令が下れば銃殺できるよう分類する作業で忙しいから』と言ってすぐに戻っていった」

というエピソードがあった。

この間当会が幾度も言及している「有事の際は収容所の囚人は皆殺しにする」という北朝鮮の基本方針を改めて浮かび上がらせる証言だった。

3月から4月にかけて北朝鮮が緊張の度を高めていく中で、コントロールを誤って局地的武力衝突が生じ、収容所の囚人皆殺しが現実のものとなりはしないかと懸念を抱いたが、それは回避されたようだ。

これに関して、つい先日、咸鏡北道保衛部の元要員で近年韓国入りした者の話を聞くことができた。

2005年ごろのことだが、この元要員によると、道保衛部の事務所に輸城(スソン)25号管理所の管理要項があり、その中に『非常時の人員管理対策について』という項目があった。

内容として「2区域に集結させ上部の指示を受ける」と書いてある。

上司の部長に「この『上部の指示』とは何ですか?」と尋ねたところ、概略以下を教えられたという。

「その『指示』とはボタンを押すことだ。地下の坑道の一つである2区域は厚さ6ミリ超の鉄板で覆われていて、そのボタンを押すと高圧電流が流れる仕組みになっている。その中に押し込められた収容者たちは感電して死ぬ」

25号管理所は市街地に近く、銃殺や爆殺をすればその音が響き、何をしているのか市民に察知されかねない。そこで音もなく静かに殺すために高圧電流で感電死させるということだった。



清津市  
輸城 25号管理所

北朝鮮地図  
©Nations Online Project

## NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」 本田徹医師の番組を見て

常任世話人 菅原民生 

**本** 本田徹医師の思索の透明な深さには、言葉を失いますね。「草木国土悉皆成仏」の説明が最新の『Dr.本田のひとりごと』にありますので(シェア=国際保健協力市民の会のホームページから入って、スタッフ日記のなかにあります)、是非お読み下さい。

彼は 30 歳のとき、小児科の医師として、北アフリカのチュニジアへ青年海外協力隊員として赴任し、イスラム教に傾倒します。ひげを伸ばしたのはその証(あかし)だと聞いた記憶があります。(いまのちょびひげではなく、その時はあごひげもあった)。キリスト教にも強い関心を持ち、新約聖書(ルカ福音書だったか)が愛読書の時期があったように記憶しています。要するに仏教と二つの一神教が、彼の中で矛盾なく統一され、血肉となって彼の医療活動を支えているのは、やはり彼の思索の深さの故なのでしょう。

医療を最も必要とする人々が、医療から最も遠いところにおかれる不条理。それに立ち向かう思いが、チュニジアに始まって、山谷にまで続く彼の実践を貫いています。直接の治療活動と並行して、あるいはあとから、予防医学の普及のための教育を組織して行く取り組み。そのとき彼が先達(せんだつ)と仰ぐのが、一人は長野県佐久総合病院の若月俊一医師。チュニジアのあと、そこで武者修行をして、予防医学の理論を深

めました。もう一人の師が中米を中心に、発展途上国の医療に取り組んでいるデビッド・ワーナーという活動家。この人の『医者のないところで』を日本語で出版した喜び。これらの詳しい話しが「Dr.本田のひとりごと」(42)にありますので、こちらも是非読んで下さい。

勤務していた病院の院長先生に見込まれてその病院の院長を継ぎ、ライフワークであるプライマリ・ヘルス・ケアの実践システムを発展させて、還暦を機に後進に道を譲って、一介の医師に戻る。その潔さ(いさぎよさ)。

医師としての活躍のほかに、NGO シェアの、国際協力の活動を発信し、それを支えるボランティアを育てるシステムができている事があげられます。私は彼から、とりあえず国際協力においては相手を尊重するという精神を学んだのですが、それ以外ではあまりにも大きく、圧倒されて、十分学べない事を痛感しました。

### 同上そして補足 小川晴久

6月12日の夜私は何気なくNHKTV「プロフェッショナル仕事の流儀」を見終わったら、次回の予告をしました。「山谷を支える、医療の真心、本田徹医師」とあるではありませんか。私の知っている、NO FENCE の会員

5頁へ続く 

でもある本田さんでした。私はうれしくなりました。最初に彼を紹介してくれた菅原民生氏に電話しました。民(たみ)さん——私は同郷の先輩菅原民生氏をこう呼んでいます——はそのことを知っていました。ご本人から知らせがあったとのこと。民さんのお母さんが昔小学校の先生をされていたとき、本田氏のお母さんが生徒だったので、両家は親しい間柄でした。因みに本田さんのお父さんは本田英郎という劇作家でした。「判決」というテレビドラマの脚本を半分以上書いたことで知られています。民さんの紹介で年賀状を交換するようになり、年賀状で2009年1月NO FENCEに入会してくださいという私の訴えに応じて入会してくださいました。そして時々短い添え書きで励まして下さっていました。本田さんにはチュニジアでの2年間の医療体験を綴った「文明の十字路から」(連合出版)という本があります。土曜日15日の夜ラッキーにもご本人と電話連絡がとれ、NO FENCEの会員であることを公表してよろしいかと尋ねたところ、光栄ですとのご返事でしたので、翌日の日曜私はNO FENCEの会員に半数以上電話を掛け、17日の番組を観て欲しいと頼みました。

さて、その感想ですが、予想以上でした。私には一人暮らしの山谷の人々から学ぶという視点はありませんでした。しかし本田さんは「どんなに苦しくても人の世話にならず生きる」「精一杯の力で生きる」山谷の人たちから学んでいました。高齢化社会に向かう中これは大切なことです。今一つ笠智衆に似た板橋忠義(ただよし)さんという老人の大好きな家というのが、山谷のアパートの一人暮らしの部屋であるという事実でした。この事実には衝撃を受けました。この老人の大好きな家に帰りたという希望を実現すべく、本田医師は懸命に努力する。本田医師の日々の実践とはこのようなものだ。20分以上この老人とのケースが放送されました。物静かなこの老人生き方、姿、その希望に沿おうと努力される本田医師の姿。人の世話にならずに生きるという人間のあるべき原点＝基本と共に私が学んだのもこれでした。予想をはるかに超えるものでした。北朝鮮の強制収容所という異常な現実と空間を早くなくし、この番組から学んだことを、自分の日々の生活の中で実践していかなければならないというのが、この番組を観た私の感慨です。

## 歴史をつくる—今やるべきことは何か！

 世話人 山下誠

もう、20年以上前の話になります。

“「お父さんは、その時何をしていたの？」と、後に子供に言われたときに「やるべきことをしていた」と、私は言いたいのだ。”

アパルトヘイト下の南アフリカを舞台にしたドキュメンタリー番組で語られた、「なぜ、あの子と遊んではいけないのか？」と訝る我が子を前に人種差別撤廃に立ち向かう決意をしたある父親の言葉を、心に刻みました。

数年後、アパルトヘイトを基盤にした南アフリカの体制は崩壊し、多くの人々がネルソン・マンデラの演説に熱狂しました。しかし、自分がその場にいたら、「あの時やるべきことをしてい

6頁へ続く ➡

た」と胸を張って言えていただろうか、と今自問します。

もう、30年以上前の話になります。

初の海外旅行に選んだドイツで、私はユダヤ人強制収容所跡を訪ねようとしていました。ところがその多くが当時の東ドイツ領内にあり、短い日程ではそうたやすくは行けません。そんななか、唯一訪問可能だったのがミュンヘン郊外の“ダッハウ”でした。アウシュビッツに比べると規模も小さい(はずだ)し、知名度も低いですが、当時の人々の凄まじいばかりの狂気が凝固した収容所の遺構の上に、私は言葉を失い立ち尽くすばかりでした。

数年後、連合軍により収容所が解放されました。全世界の人が、事実を驚愕し、悲しみ怒りました。しかし、自分がその場にいたら、「その狂気には気が付いていたし、抗いもしていた」と、胸を張って言えていただろうか、と今自問します。

南アフリカのアパルトヘイトやナチスのユダヤ人迫害を擁護する人は、今となっては例外的でしょう。しかし、その時その場にいた人々が今の我々と同じように批判的であったりとか、抵抗的であったわけではありません。もしそうなら、このような悲劇は起こらなかったはずなのですから。

会報を読み返しながら、1939年に発行された『白書(The White Paper on The Treatment of German National in Germany)』のなかで、英国政府がすでにユダヤ人強制収容所の存在を指摘し、その残虐性を告発していたことを知りました。しかし、その後6年間、狂気の連鎖の中で犠牲者が恐ろしい数にまで膨れ上がることを、ドイツ国民も国際社会も防げなかったのです。映画『ヒトラーの最期の12日』でヒトラー秘書である主人公のモデルになった女性は、「きちんと目

を開いていれば、あの魔物の正体を見抜けたはずだ。しかし、その時の私はあまりに若く愚かだった」と、作品の冒頭で述べていますが、誰がどのように反省しようとも、その命はもどりません。

実は私は、姜チヨルファン・安嚇共著『北朝鮮からの脱出』を、最近になって初めて読みました。一言で言うなら、かの英国政府の白書をはるかに凌駕する歴史的な告発の書です。ところが、このようなものは“個人的”な書であり、“全体”を示すものではないと、つい最近まで手に取ろうとさえしなかったのが他ならぬ自分であり、おそらく私の周囲にいる人たちの多くも、きっとそうなのではないかと思うのです。記者である池田氏でさえ、「(二人の)手記の内容は、私たちにとってとうてい信じられないものであり)、はたして読者がこの手記を読んで実際にあったことだと信用してくれるかどうか、大変疑問に思った。しかし、(お二人)に会って彼らの話を聞いてからというもの、この本を出版しなければならぬ(中略)という使命感を感じるようになった」とあとがきに述懐されていることを思うと、目的までの道のりは未だ遠しと言わざるを得ません。

しかし、やがて来るべき時が来た時に、「私はやるべきことをやった」と言えるようでありたい。だから、かつてアパルトヘイトに、ユダヤ人迫害に怒り闘った人々に、「あの時と同じじゃないか？まさか、これを放っておけるのか？」と呼びかけたいと思います。あの英国政府の白書の精神は、かつて戦火渦巻いていたヨーロッパでは実現のしようがなかったのかもしれませんが。でも今、ここ東アジアは違います。言い訳は通用しないし、している暇もないのです。なぜなら、まさに今この瞬間にも、彼の地の山奥で凄絶なる生をようやく紡いでいる人たちがいるのですから。

## 日本人よ目を覚ませ！ ラビア・カーディルさんの切なる訴えを聴いて

 副代表 小川晴久

**守**る会の三浦小太郎副代表の強い勧めで去る6月21日世界ウイグル会議総裁ラビア・カーディル女史の講演を聴きに行った。「ウイグルの母が語る、いまこそ日本人に知ってほしい、ウイグルの苦難と慟哭、望む未来」と題するものだった。彼女は1948年生まれ。1999年から2005年まで中国政府によって投獄されていた。この講演で聴いたこと、当日もらったパンフ『東トルキスタン市民強制失踪事件』、ネットで聴き、読んだ前日の彼女のネットで訴えた内容と挨拶から、わかった大事なことを、ここに記し、NO FENCEの課題達成のために役立てたいと思う。会員の方のご海容を乞う。

**東トルキスタン** ウイグル人に自由の回復をと願い運動している人々(世界ウイグル会議に結集しているウイグル人ほか)は自らの国を東トルキスタンと呼んでいる。モンゴルもウイグルもチベットもかつて独立していた。ウイグルも世界史の中で貢献した。3世紀ごろ文字を持っていた。1933年東トルキスタンイスラム共和国、1944年東トルキスタン共和国を設立した。1949年東トルキスタン共和国は中国共産党に侵略され、植民地にされた。中国側は「新疆ウイグル自治区」と呼んでいる。ラビアさんは63年間中国に服従させられてきたと言われたが、確かにそうである。上記パンフに付された地図を見ると、東トルキスタンはチベットよりも西にあり、ウルムチを中心に、東にハミ、西にカシュガル、真ん中にトウルファンやクチャがある。下半部はタクラマカン砂漠である。昔大学の演習で玄奘の『大唐西域記』を読んだときに出てきた西域の都市の数々だ。ここが

今中国の領土で「新疆ウイグル自治区」とされている。これだけでも異常だ。2年前東アジア実学シンポジウムで内モンゴルに出かけたとき、ジンギス汗は中国人だと学校で教えていると聴いて一驚したが、それと同じような異常さだ。何年か前に朝鮮古代三国時代の高句麗を中国共産党が中国の地方政権であったと言い出していることを知り、憤慨に堪えなかったが、同じ異常さである。

**中国政府のウイグル民族抹殺政策** ラビア・カーディル女史は中国政府(中国共産党)はウイグル人・ウイグル民族を抹殺しようとしていると言われ、続けてこの人種絶滅政策はウイグルとチベットに対して行われているが、ウイグル人はもっと苦しい、なぜならウイグル人の宗教はムスリム(イスラム教)である、中国政府は(アメリカがアルカイダをテロ勢力としているのを利用して—小川)テロとの戦いとしてウイグル人弾圧を進めているからだ指摘された。このことは知らなかった。東トルキスタンの人口は930万人であるが、大半がイスラム教徒であるという。2003年以降ウイグル語の教育も始めは大学で、続いて学校全てで禁止されている。中国語のしゃべれない何万という教師が追放され、ドゥツパという民族帽や民族衣装の着用も禁止されつつあると言う。2004年から14歳から25歳までのウイグルの農村の若い女性たちが中国東部や南部に就職の名の下に強制移住させられ(24万人も)、安い労働力で、缶詰め状態で酷使されている。また一部は売春させられている。2009年6月26日広東省韶関市の玩具工場で起きた

8頁へ続く →

漢人労働者とウイグル人労働者間で起きた争いはこうした背景がある。17人のウイグル人が殺された。9日後の7月5日ウルムチで起きたデモは中国当局に徹底した調査を要求するものだった。中国政府は武力で弾圧し、その日の夜から翌朝に掛けてウイグル人の家を襲い、男性を100名余も逮捕連行し、その人たちの行方は全く不明という。路上で殺されたり負傷しただけでなく、多数の強制失踪者ができたのである。私はこれを知って1938年11月9日の夜に起きたナチによる計画的なユダヤ人襲撃——水晶の夜事件を思い出した。明らかに暴動の首謀者・参加者たちを検挙するという名目で、ウイグル人の男性を検挙し、隔離するというウイグル民族抹殺、東トルキスタンの漢人化の強行である。どうして温和なウイグル人も黙ってられようか。漢人が刃物・棒で武装しているので、ウイグル人男性も同じように武装せざるを得ない。それを中国政府はテロリストたちと宣伝し、「過激思想、テロ行為、分離主義」を罪状に軍隊で弾圧し、死傷させ、逮捕しているのである。中国当局の武装弾圧は近代的な兵器と道具による。ウイグル人のデモ隊は刃物と棒切れだけである。彼らがイスラム教徒というだけでテロリスト扱いをする。今年の6月26日にも4年前の犠牲者たちを追悼してウイグル人は集会を開いた。それを漢人、中国政府は弾圧した。翌日のNHKBSニュースは、刃物を持ったウイグル人の武力行動を中国政府は徹底して取り締まったと報道した。背景の説明無しであるから、無慈悲で中国側に加担した報道となっている。

数年前にも私は三浦小太郎さんの勧めで在日ウイグル人の集会に参加した。今思えば2009年7月5日事件直後であったであろう。基本構図はこのとき頭に入ったが、その後NO FENCEの活動に集中し、忘れていたとっていい。今回の講演と関連資料で事

態がここまで進んでいることに驚きを覚えた。私のウイグル認識、中国認識は遅れていたのである。私は長年中国の思想特に儒教の勉強をしてきた。論語に示される孔子の思想と生き方に対する尊敬の念は、最近三浦梅園をも介在させているので、非常に高くなっている。近代以前の儒教が実学と呼ばれていたのも、それを実心実学と捉え、近代以前の实心実学から学ぶべきものがある(地球の生態系を守るために)ことを提唱している。実は私と近代以前の实学との出会いは1962年に日本で翻訳された平壤で出た『朝鮮哲学史』(1960年刊)である。そこには17世紀中頃から19世紀中頃までの約200年間の近世に花開いた思想を实学思想と名づけて紹介していた。詳しくは拙書『朝鮮実学と日本』を参照していただきたい。私は1978年37歳の時1年韓国に留学し、以来今日まで東アジアの近代以前の实学研究に従事してきた。1990年から韓国、中国、日本の三国の实学研究者たちが2年ごとに順繰りに東アジア実学国際シンポジウムを開催してきた。2年前の内モンゴル行きも中国実学研究会が当番で開催したシンポジウム参加によるものであった。

中国も文化大革命が終わり、改革開放政策で民主化が進められてきた。中国人民代表大会で労働教養所の廃止の要求が下から上がる所まで来ている。私は昨年末に出した『北朝鮮 いまだ存在する強制収容所——廃絶のために何をなすべきか』(草思社刊)の第二章23頁末尾で、中国政府にある役割を果すように要求している。中国にも強制収容所は存在するが、北朝鮮のそれとは違いがあることに基づいての提言である。このことを世話人会で話題にしたとき事務局長の宋允復氏と大変な口論になった。中国政府にこんなことを期待するのはナン

センスと言う趣旨である。私は私の根拠と確信を持って猛烈に反論したが、今回ウイグルに対し中国政府がやっている人種抹殺の実際をみると、宋さんの反論もうべ(肯)なるかなと感じた。それ程中国政府(中国共産党)がウイグル人に対してやっていることは酷(ひど)いのである。

**中国の二つの側面** 中国は二つの側面を持っている。一つは全て資源を自分の物にするための同化主義、ウイグル人に対する民族抹殺主義、もう一つは下からの民主化が少しずつ進み、中国の強制収容所を改善せざるを得なくなっている側面(アメリカに本拠を置くハリウー氏たちの労働改造所撤廃運動、国内の人民代表者会議における下からの改革の実践ほか)である。この二つは矛盾している。北朝鮮の強制収容所を解体する運動を進めるに当って、中国の二つの側面に対し、対処していかねばならない。前者に対しては断固批判し、後者に対しては国内外の民主化勢力に依拠し、中国政府の国連常任理事国の面子をも利用して、この側面を促進、実行させる。

**日本人よ、目覚めよの意味** 今回ラビア・カーディル女史の講演を聴いて私は尖閣諸島問題以上に中国政府(中国共産党)のウイグル人抹殺政策に目を開かされた。ラビアさんは、日本人よ、目覚めよといわれた。明日はあなたたちの問題ですよという意が込められていた。私を含め、今の日本人は中国の支配下に陥るとは思っていない。しかし長い歴史の慣行で、ウイグル人を発見できていない。中国の側からウイグルを見失ってしまう。「新疆ウイグル自治区」としか見えず、東トルキスタンという視角は無い。全く弱い。この点をラビアさんは先ず衝(つ)いていると受け止めたい。日本人よ、目覚めてくれ！ウイグル人の苦難と慟哭、望む未来を知ってくれ！と。11人の子を産んだナビアさんの声をしっかり受け止めたい。北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会の副代表の三浦小太郎さんは、北朝鮮の人権運動にも、ウイグル人の自由を求める運動にも、どちらにも取り組んでいる。ラビアさんと共に、三浦小太郎氏にも深く感謝したい。広東省の玩具工場で、監禁状態で働かされ、時に売春を強いられ余儀なくされているウイグルの農村出の若い女性たちが、東トルキスタンに戻り、ウイグル人と結婚して、ウイグルの子供を産み、ウイグルの伝統を守って行ける様に、これから生あるかぎり努力したい。中国が世界から愛される民族になってほしいからでもある。北朝鮮の強制収容所の廃絶のために中国に努力してほしいためである。

北朝鮮の山奥にある「強制収容所」をなくすため、多くの人々に呼びかけています。

 **NO FENCE**

**ノーフェンス in North Korea**

〈北朝鮮強制収容所をなくすアクションの会〉



## 活動報告 本の感想会

 常任世話人 並河真知子

**去**る3月3日開かれた(ふくろう祭り)イベントの反省会を兼ね、「北朝鮮脱出」「北朝鮮未だ存在する強制収容所」の感想会を5月26日(日)に開きました。

参加メンバーは私含め5人、

「北朝鮮脱出」への感想:酷くて先へ進めない/この現実を広めないと/酷い仕打ちに段々麻痺してくる/気持ちが悪かった

「北朝鮮未だ存在する強制収容所」への感想:興味深いけど引き込む力が無い/論文でないのだから一般向けに崩して書いて/手記の事例を具体的に羅列したら迫力がある/分かりやすい表現で書いて…

等の意見が述べられました。

本を読んでもらうという事は、大変な作業でやっと感想会ができた訳ですが、「北朝鮮脱出」で3箇所も涙した私にとっては非常に物足りない感想でした。

そこでやはり、証言集会の必要性を感じ、実行委員を募って集会開催の案を練っていこうと計画しました。

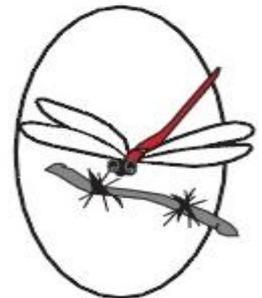
時期は未定、多分来春か。

場所は私の所。

出店者を募集して物品販売をし、お祭りのイベントにする。

貧乏人の私にとって、必要経費など NO FENCE の財源で協力いただけたら開催は可能かな?と思います。

皆様、よいアイデアやご意見などお寄せいただけますか?



2013.07.01

## 会員みなさまへ

私たち「NO FENCE」は、北朝鮮の強制収容所をなくすためのアクションを展開するにあたって、会員みなさまからの声を常にお待ちしています。

- ・北朝鮮強制収容所体験者の本を読んで感じたこと
- ・「NO FENCE」活動についての提言
- ・北朝鮮の強制収容所について日頃から思っていたことなど…



みなさまの心のこもった一言が北朝鮮の強制収容所をなくす原動力となります。

お問い合わせ(編集者) [yi\\_ew@hotmail.com](mailto:yi_ew@hotmail.com)